

三の酉

久保田万太郎

青空文庫

一

——おい、この間、三の酉^{さんとり}へ行つたろう？ ……

ズケリといつて、ぼくは、おさわの顔をみたのである。

——えゝ、行つたわ。 ……どうして？ ……

と、おさわは、大きな目を、くるツとさせた。

——しかも、白昼、イケしやア〜と、男と一しよに、よ……

と、ぼくは、カセをかけた。

——あら、よく知つてゐるわね。

と、そのくるツとさせた目を、正直にそのまゝ、

——おかしいわ。

と、改めて、ぼくのほうにうつした。

——ちツともおかしかアない。 ……おかしいのはそツちだ……

— みたの、あなた、どツかで？ ……

— そうだろうナ、多分……

— わるいことはできないツて、ほんとね。 ……けど、どこで……どこをあるいてるの
をみられたろう？

— それよりも、一たい、何ンなんだ、あれ？ ……

— あれツて？

— あの男さ。

— あゝ、あれ？

— 顔よりも大きなマスクをかけて、さ。 ……そんなに、人めがはゞかられるなら、何
も、昼日中、あの人ごみの中を、いゝ間まのふりに、女を連れてあるかなくなつたつていゝじ
やアないか？

— そうだわよ。 ……そう思つたわよ、あたしだつて……

— それだつたら、なぜ止させなかつたんだ？ ……ウスみツともない……

— だつて、それほどの人じやアないんですもの。

— それほどの人じやアない？

— そうよ。

— それほどの人じゃアないのに、君は。……そんな男と、あゝして？ ……

— えゝ、そうよ。……一人じゃア寂しいから、ヒヨイと出来ごゝろで誘ったら、すぐに附いて来たのよ、あの人……

と、おさわは、ケロリとしたもので

— あたし、戦争がすんだあとでも、まだ、ずっと、上州の田舎に疎開したまんまでいたこと、いつか、話したでしょう？ ……その間でも、あたし、お酉さまだけは、毎年、欠さなかつたのよ。

— ということは、毎年、わざゝ、そのために、上州の田舎から東京へでゝ来たつてわけか？

— えゝ、そう……

— 何んだつて、また、そんなに信心なんだ、お酉さまが？ ……

— 信心じゃアないのよ、好きなのよ。

— 好き？

— そうなのよ。……好きなのよ、お酉さまが、たゞ……

——だって、好きッてのは……

——おかしいでしょう？ ……そうよ、おかしいわ、わけをいわなければ……と、自分で、自分をうなずいてみせ

——あたしね。……じつは、それでも、吉原の生れなのよ。

——吉原の？

——知らなかったでしょう？

——初耳だ。

——だって、あたし、だれにも、めッたに、いわないんですもの、それを……

——どうして、さ？

——それをいうの、かなしいんですもの……

——といって、そツと目を伏せるようにしたかと思うと

——ウ、フ、フ、フ……

と、急に、おさわは、いかにもおかしように、声をだしてわらった。

——ねえ、顔より大きなマスク。……うまいこというわね、あなたッて人。……ほんとにそうだったわ、顔より大きかったわ、あのマスク……

二

——何を、つまらない……

ぼくは、わざと、苦い顔をして

——自分で自分のはなしの腰を折る奴もないじゃアないか？

——顔より大きなマスク。……そうなんですもの、その通りなんですもの。……でも、あたしには、うまく、そうはツきりいえなかった……

と、おさわは、もう一度、わらい直さなければ承知しなかった。

——セツかく、しんみりしたはなしになりかけたとき、どうして急に、そんなつまらないことをいいだしたんだ？

と、ぼくは、すなわち、その顔をあわれんだのである。

——不思議な女だなア、君ッておんなは……

と、おさわは

— そうでしょう、不思議でしょう？ …… 自分でも、ほんとにそう思うの、とき／＼

／＼……

と、すぐそれにこたえて

— だって、いま泣いたかと思ったカラスが、すぐもうわらってるんですものね。……

どうかと思うわ……

— 自分でいってれば、世話アない……

— ねえ、でも、どうしてでしょう？ …… いまだって、あたし、それをいうの、かしいんですもの、といった途端、何んだかほんとになくなって、それだけで、もう、涙がで、来そうになったの。……と、そのとき、ヒョイト、あなたのいったマスクのことがおもいだせたの。……そうしたら、さア、急にこんどは、おかしくなって、おかしくな
つて。……つまり、そういう後生樂にできてるのかしら、あたしツて？ ……

— けだし、浮気ものといわれる所以のものも、つまりは……

— いやよ、それは。……それはないわ、浮気ものは……

— でも、赤坂のおさわさんといえば、あゝ、あの……

— 浮気もの……というんでしょう、ほかとち外土地の、あたしの逢ったことのない人まで……

——という話だね。

——どうして、そう、でたらめなんでしょう、世間の人ツて。……一人が何んかいとうと、知りもしないくせに、それからそれ。……一たい、あたしがいつ、どこで、何をしたいというの？ ……

——まア、いゝよ、それア……

——よかアないわよ。

——じゃア、それは、いずれゆツくり研究することにして、それより、いまの、吉原生れのはなしのさきを、もツとつゞけよう。……大丈夫だ、これだけ揉めば、もう、かなしくなりやアしないから……

——だめよ、急にそういつたつて。……こう揉まれてしまつちやア、こんがらかつた糸の、どこが……

——わかつた、分つた。じゃア、ぼくが、アナウンサーの役どこになつて、こツちからいろく聞く。君がそれにこたえる……それならいゝだろう？ ……

——うまいこと聞いてよ……

——うまいこと、参りましたら、御喝采。……ということを知つてるか？

——李彩じやアありませんか。

——感心！……といたいだが、あの支那手品の高座を知っていちやア、年が知れるナ？

——知れたつていゝわよ。……どうせ、もう、来年は四十六。……いよく五十の坂のかげが、目のまえにチラ／＼しかけて来たんだから……

——何んだ、そんなになるのか、もう？……

——何んだ、まだそんなものかと被^{おっしや}仰ったほうがいゝわ。

——止そうよ、もう、漫才は。……色気がなさすぎる……

——どうして、こう、テレ性なんだろう、あたしッてもものは？

——デ、吉原デ生レテ？

と、ぼくは、いそいで、おさわの口をふさいだ。……“どうして、君ッてもものは、そう、自分を引ッ掻きまわさなくつちやア気がすまないんだ？”という代りに……

——ハイ、吉原デ生レテ、吉原デ育チマシタ。

と、しかし、おさわは、翻然、すぐにぼくの誘いの波にのつた。

——家ガ仲^{ウチ}ノ町デ、引手茶屋ヲシテイマシタカラ……

——ソレガ、ドウシテ、後ニ、赤坂ダノ、葭町ダノ、住人ニナリマシタカ？

——震災デ、家ヲ焼カレ、フタオヤ両親ヲナクシテ、一人ボツチニナリ、ワルイ親類ニダマサ

レテ、芸妓ゲイシャニウラレ……

とまでいいかけて、急に

——馬鹿らしい。……よしましようよ、もう、対談ごっこも……

おさわは、わらえもしない、といったような顔をした。

——しかし、震災で、家を焼かれたのはいゝとして……

と、ぼくはいった。

——両親をなくしたというのは、矢つ張？ ……

——震災でよ。……くるわ廊の中の花園池に入つて死んだのよ。酷ひどかったのよ、それア、そこ

で死んだ人の数だけだつて。……家中みんな、一しよに逃げたんだけど、途中ではぐれて、

偶然、ほかの方角へ逃げたんで助かったのよ、あたし……

——と、お父つあんやおつ母さんばかりで、家中、ほかのものもみんな？ ……

——そうでもないのよ。……なかに一人、年ちゃんという、あたしと仲のよかった抱え

のお酌さんがいてね。……この人も、花園池に入らなかつたばかりに助かつたわ。

—そのとき、いくつだった？

—あたし？ ……あたし、十四。 ……女学校の一年。 ……お下げて、それア、可愛かったわよ。

—女学校へ行ったのか、お茶屋のむすめが？ ……

—行ったわよ。 ……どうして？ ……

—だって、釣合わないじゃアないか、吉原に女学校は？ ……

—知らないのよ、あなたは。 ……あゝいうとこの家庭ほど、ヘンにうるさいものなのよ、子供の教育のことなんかにかけて。 ……ことに、うちの父と来たら、大ていの堅気よりもきびしくって、あたしがその年ちゃんと仲よくするのさえ、いゝ顔しなかった位。 ……一つには、引手茶屋なんて稼業しょうばいは自分一代のもので、いつまでやってるものでもなければ、また、いつまでやって行けるものでもないと思つてたらしいのね。 ……ということとは、吉原なんてものは、いつかはなくなる。 ……それには、娘を、うんと仕込んで、いゝところへかたづけて ……

—つまり、インテリだったんだナ、いまでいえば ……

—そうなのよ。 ……だって、一度か二度、浅草の区会議員になったことさえあるんで

すもの。

——すしやのむすめでなくって、区会議員の娘か？

——その娘がどうでしょう、十五の春から四十台の今日が日まで、三十年、ずつと芸妓をして来てしまったんですものね。……あきれるわ。こうと知ったら、あのとき、花園池で、親たちと一しよに死ぬんだったわ。……そのほうがよかったわ……

——必ずしも、そうもいえないだろう？ ……生きていてよかったと思つたことだつてあつたろう？

——それアね、長い三十年のあいだですもの、二度や三度あつたわ。……でも、いまになつてみれば、夢よ、みんな。……水に映つた月みたようなものよ……

——そういつたら、しかし、だれだつてそうだ。……人間の一生なんてものは、はじめッから、そういう風にしくんであるんだ……

——ところが、世間には、そうでない人もいるから口惜しいのよ。……いまいった年ちやんツて人ね？

——うん。

——この人なんか、しみ／＼、生きてゝよかった人よ。……あのとき、死なゝかった

ばかりに……助かったからこそ、いまのような幸せな月日に逢えたんだわ……

—— 附合ってるのか、いまでも、その人と？

—— あたし、この人の疎開してたところへ、この人をたよって疎開したのよ。……遠くに
いるもんで、逢うのはタマだけれど、手紙のやりとりは、始終、してるわ。

—— どこにいるんだ、いまは？

—— 鎌倉。

—— 何をしてるんだ？

—— 結婚して、ちゃんとやってんのよ。……あなた、知らない、柴、白雨ツて絵を描く
人？ ……

—— 柴、白雨？ ……知ってるよ、名前は。……むかしは、岸田劉生なんかの仲間の洋
画家だったけど、いまは日本画ばかり描いている……

—— その人の奥さんなのよ、年ちゃん、いま……

……逢うのはタマだけれど、といった口の下で、すぐにこういうのはおかしいが、といいわけしいく、おさわは、そのあとで、じつは、四五日まえ、鎌倉に年ちゃんを訪ね、引きとめられるまゝ、一晩、泊つてさえ来たというはなしをした。……いかにその年ちゃん夫婦の仲がいゝかということを、そして、その家庭の空氣の、いかに、しずかに、和やかに落ちついているかということを、事細かに、いち／＼例をあげて褒め上げた。……そのなかで、とくにぼくの心に止つたことは、夕方、年ちゃんと、年ちゃんの旦那の白雨さんと三人で、食事の仕度のできる間、海のみえるところまで、ぶら／＼、あるきにでたことについてだった。……年ちゃんの家は、材木座で、細い砂みちづたいに行くと、海まで一丁となかった。

——あツといって、あたしおもわず立留つたのよ……

と、おさわは、やゝ大仰に、胸を反らしてみせたのである。

——どうして？

と、勿論、ぼくはわらつた。

——だって、あなた、その海の波のいろ。……青いなんてものじゃアないの。……紺な

の。……びっくりするような、何んともいえない、凄じ紺いろなの……

——じゃア、もう、そのとき、日が落ちていたんだらう。

——でも、まだ、空はあかるかったわ。……それだけに、よけい……一層、それが際立つてみえたのかも知れないのね。……途端に、あたし、おもいだしたの。

——何を？

——熊谷^{くまがい}の芝居の、“組打^{くみうち}”んとこのあの海の道具を……

——違うよ、矢つ張、二長町仕込は、いうことが……

大正期の、菊五郎、吉右衛門という二人の若い役者。……その人気によって盛り上げられたいわゆる市村座時代は、また、東京の、新橋、赤坂、葎町、柳橋といった、“それ／＼の花柳界にとつても黄金時代だった。……おさわの、たま／＼いったその“組打”の海の一言は、ぼくに、ゆくりなく、ありし日の、自動車のまだめずらしかったころの東京の人情をおもいださせたのである。

で、そのあと、三人が家へ帰ると、茶の間には、もう、あか／＼と眩しいほどのあかりがついて、大きなチャブ台の上に、のり切れないほどの、たくさん料理の皿が並んでいたばかりか、長火鉢の、たツびにつがれた火のうえにかゝった鍋の中には、みるから食

慾をそゝるおでんが、ふつくと煮えていた。

そして、それらの、さかなやからとゞいた鯛の刺身だけを除いて、あとは、みんな、台所のぼアやの手ごしらえばかりと聞いて、おさわの、どんなに驚いたことか……

——さ、何んにもないけれど……

と、白雨さんは、自分で銅壺からチロリをだして、『まア、一つ……』とついでくれ

——このおでんだけは、いさゝかわが家の自慢でね……
といった。

——ほんとよ。……ほんとにそうなのよ。

と、年ちゃんも、その尾について

——何がいゝ？ ……とつて上げるわ……

——じゃア、すじと、お豆腐を……

——大根は、どう？ ……よく煮えてるわ……

——だんくにいたゞくわ。

なるほど、自慢だというだけのことはあった。……一口、口に入れて、すぐにわかった。
——結構ねえ。……たゞじゃアないわ、このお味……

おさわは、世辞でも、けいはくでもなくいった。それほど、ほんとに、おさわは、ふだん平常は嫌いで喰べたことのない、その野菜の煮込に感心した。

——外のものにも、好きに、さア、箸をつけて……

と、白雨さんは、チロリをとり上げては、おさわの猪口を一ぱいにした。

——だめですわ。……そうはいたゞけませんわ。

——まアいゝさ……今夜は、もう、あとは寐るばかりなんだから……

——遠慮しちゃア、だめよ、おさわさん……

と、年ちゃんも口を添えた。

——遠慮なんかしないわ。

と、おさわはまけずに応えた。

三人だけの、水入らずの宴会は、かくて九時すぎるまでつゞいた。

白雨さんは、酔えば酔うほど、機嫌がよくなった。

それを、また、とき／＼はたしなめつゝ、しかも、決して、無理から切上げさせようとはしない年ちゃんの顔のあかるさ……

——これだ、これなんだ、これでなくっちゃアいけないんだ……

と思つたら、おさわは、急に胸が一ぱいになった。……何が、これだ、これなんだ、これでなくっちゃアいけないんだ、か、自分にもよく分らなかつたが……

あくる朝、寝坊のおさわが、何んと、八時まえに目をさました。しかし、そのときには、もう、年ちゃんは、エプロンをかけて、台所を出たり入ったりしていた。白雨さんは、庭にでゝ、犬にからかつていた。

風の加減か、昨日はきこえなかつた波の音がしていた。

——お早うございます。

と、おさわは、いさゝかキマリわるく、縁側に膝を突いた。

——お早う……

と、白雨さんは、元気のいゝ声で

——いゝ天気ですよ。……きょうの三の酉は大あたりだ……

と、問わずがたりにいったので……

四

——何んだ、それで分つたのか、その日、三の酉だつてことが……と、ぼくは、わざと、からかい面^{づら}にいった。

——あら、そうじゃアないわ。

おさわは、まがおで

——いけない、早く帰らなくつちやア。……うかくしてたら、また、帰りそこなう。

……そう思ったゞけよ。……だつて、どこにも、一ぱい、日があたつて、それアのどかだつたんですもの……

——で？ ……

——で。……でも、矢つ張、何んのかの、お昼すぎになつてしまったわ。

——マスクの先生とは、どこで、それから逢つたんだ？

——電車のなかで……

——というと、その帰りの？ ……

——えゝ、そう、横須賀線の……

——勿論、まえから知つてゐるお客なのだろうが？ ……

——えゝ、もう、知ってることは二三年まえから。……けど、どツかの会社の重役さんというだけで、じつは、名前もよく知らないの。……外の人が、シイさん、シイさんといつてゐるから、一しよになつて、シイさん、シイさんといつてゐるだけ……

——そんなバカなことが……

——あるから不思議よ。……うた沢をうたうんで、時おり、そのお相手を仰せつかるだけ。……声はいゝのよ。……一寸、素人ちよつとばなれがしてるのよ……

——先方さきでみつけたのか、君のほうから声をかけたのか？

——両方。……両方、同時に。……あたしが「まア」と思わずいったとき、先方も「やア」といったのよ。……一つには、大へん空すいた電車で、どこもかしこもガランとしてたもんで、それですぐ分つたのよ、あたしにしても、先方にしても……聞いたら、逗子から乗つていたのよ、先方は……

——で、空いていたから、一応、仁義として、側へ行つてすわつた。……「いゝお天気ですわねえ」と、まず、君のほうからいった……

——御名答……

——女のほうから口をきられて、だまつてる男はない。……すくなくも、「そうだね」

とか、〃ほんとにね〃とか、返事をしたにちがいない。……ことに相手が、うた沢の如きをたしなむタマだったら、たちまち、それからそれ口がほぐれて、雪のあしたの煙草の火、寒いにせめてお茶一ぶく、それが高じて酒一つ……

——何、それ？

——〃琴責〃の阿古屋がいうじやアないか？

——ものしりね、あなた……

——はぐらかしたつて駄目だよ。……そうにちがいないんだから……

——そうよ、その通りよ。……話をしているうちに、だん／＼その人に好意がもてゝ来たのよ。……何んだか、それツきりでわかれちゃアわるいような気がして、〃お酉さまへ行ってみませんか？〃と、いつてみたの。……そうしたら〃うん、行ってもいい〃……

——だもの。……浮気ものといわれても仕方がない……

——浮気なんてものじやアないわよ、出来ごゝろよ、ほんの……

——浮気や、その日の出来ごゝろ、と、むかしツから相場はきまっている……

——あら、でも、それア……

——でも、あゝして、肩を並べて、しかも男のほうがマスクをかけてあるいてるんじや

ア、どうしたって、たゞじやアないよ、あの二人は。……おなしことでも、あれ、女のほうマスクをかけていたら、どうだろう？ ……そのわりに、いやらしくないかも知れないナ？

——どうして？

——どうしてツてわけもないが、感じの上で。……すくなくも、あるいは、ちゃんとした夫婦として、人が彼これ思わないかも知れないナ。

——そうかしら？

——で、どうした、あれから？ ……どこへ行つた？

——金田へ行つて、トリを喰べたわよ。

——それから？

——右とひだりにわかれたわよ、それで……

——よく、承知したナ、男が？

——承知するもしないもないわ。……金田の勘定、あたしが払ったんですもの。

——相手が重役だつていうのに？

——重役だツて、何んだツて、こツちからさそつたんじやアありませんか。

——よく、しかし、だまって払わしたナ？

——それア、当節の、名刺の肩書だけの重役ですもの、そんなことは平氣よ。逆に、女に、立引^{たてひ}かした位におもつたでしょう。……いゝえね、ほんというと、もう少しどうにかなつた男だと思つたのよ、はじめ、電車の中では。……そうしたら、下りたら、早速、マスキでしょう？　……それで、一度にガツカリしたら、金田へ行けば行つたで、金田ツてうちが、どんなうちだかつてことも知らない唐変木なんですもの。……うた沢だけ、それも稽古したゞけのことをうたわしてさえ置けば、それでいゝタマだということがハッキリ分つたの。……それア、あなたのまえだけど、金田にいたあいだの辛かった、つらかったこと、トリの味なんか、まるツきりわからなかつたわ。……昨夜^{ゆうべ}のおでんはうまかつたナ……と思つたら、もういけません。……しみ／＼、かなしくなつたわ、あだし、心の住^すみか
処^{みか}のないことが……

五

——さて、と……

と、ぼくは、三本目の銚子のやゝかッたるくなつたとき

——何んか喰おうじやアないか。……しやべつたら腹が空^へつた……

と、おさわにいった。

——何を上ります？

と、おさわは、火鉢のうえにふせた目をあげた。

——何んでもいゝ。

——じゃア、何か、お鍋のもの……

——いゝだろう、それも。……おとゝいの晩はおでん、昨夜はトリ。……それだったら、
今夜も、ことのついでに……

——チリにしましょう、チリに……

と、すぐに決めて、おさわは立つた。

——いゝじやアないか、自分で立たなくつても……

——ついでに、一寸、電話……

——どこへ？

——家へよ。

おさわは、襦をあげ、しずかに出て行つた。……そのうしろつきに、二十年まえ、三十年まえの芸妓の、裾をひいたすがたが感じられた。

突然、はげしい風が、庭の木々をゆすつてすぎた。

——心の住処……

ぼくは、おさわの、いまいつたことを、口の中でいつてみた。

——何んだつて、しかし、かの女……

と思つて、ぼくは、何んということなし、口に運びかけた猪口を、下に置いた。

——外は、いゝ月よ……

と、やがて、新規の銚子をかゝえて、おさわは歸つて來た。

——よく天氣のつゞくことよ。

——ほんとに。……けど、三の酉がすぎると、すっかり、もう、冬のけしきだからうれしいわ。

——好きか、君は、冬が？ ……

——大好き……

と、おさわは、熱い爛の、その新規の銚子をついでくれた。

— ねえ。

と、ぼくは、ついでもらいつゝいった。

— 来年は、一つ、一しよに行こうか。

— どこへ？

— 西のまちへさ。

— えゝ、行きましょう。

— 松葉屋でゝも時間をつないで、景気よく、宵^{よいどり}西と行こう。

— それは、嫌……

— どうして？

— あたしはね、三の西の昼間行くんでなくつちやア嫌……

— そんなこといつて、来年、三の西がなかったら？ ……

— だッたら、二の西でいゝわ。……どツちにしても、はつ西はいやなの、にぎやかす

ぎて……

— 昼間でなくつちやアいけないという理由は？

――昼間、あの人込みの中をあるいてると、死んだ父だの母だのが、どこからか、ヒョククリ、でっでも来るような気がしてなつかしいの。

――そうか、じゃア、昼間にしよう。

――その代り、マスクをかけるわ。

――だれが？

――あたしが。

――何んのために？

――あなたのためによ。

と、おさわは、ニツコリ、きれいな歯をみせてわらって、

――一日だけ、あなたの奥さんになって上げるのよ。

――あなたの奥さんに？ ……

――あなた、いま、いったじやありませんか、女のほうでマスクをかけてると、ちゃんとした夫婦として、人が彼これいわない……

――あゝ、それか……

――その代り、帰りの金田の勘定は、リツぱにあなたが払うのよ……

六

……おさわは、しかし、その年の酉の市の来るのをまたずに死んだ。……二三年まえのはなしである。

たか／＼とあはれは三の酉の月

というぼくの句に、おさわへのぼくの思慕のかけがえしているという人があっても、ぼくは、決して、それを否^{いな}まないだろう……

（「中央公論」一九五六年一月）

青空文庫情報

底本：「春泥・三の西」講談社文芸文庫、講談社

2002（平成14）年8月10日第1刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第四巻」中央公論社

1967（昭和42）年4月15日

初出：「中央公論」中央公論社

1956（昭和31）年1月

入力：kompass

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

2014年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三の酉

久保田万太郎

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>